

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	聲点「△」の機能 : 『辨正論』保安四年点について
Author(s)	佐々木, 勇
Citation	かがみ , 31 : 1 - 25
Issue Date	1994-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00031385
Right	
Relation	



聲點「△」の機能

——『辨正論』保安四年點について——

佐々木 勇

一、本稿の目的

濁點の起源については、訓點資料を用いた詳細な研究によって、明らかにされている⁽¹⁾。さらに、その後の濁點の變遷についても、解明されてきた。⁽²⁾

また、日本語音韻史の中のいわゆる清音・濁音について考える場合にも、濁點は主資料となり、従來の研究が有効である。とくに、平安・鎌倉時代においては、清濁を示す中心資料となるのは濁點であり、その使用の實態を明らかにしておく必要がある。

しかし、濁點をめぐる従來の研究の主目的が、濁音符の歴史をえがくことにあつたために、濁音を示す符號の一一の實態については、詳しくは觸れられていない。

そこで、本稿では、平安後期に生まれた複数の形式のいわゆる「濁聲點」のうち、△の聲點（以下、△聲點とする）をとりあげ、その使用の實態と機能について述べてみたい。

二、△聲點の機能に關する從來の把握

△聲點は、濁聲點であるとして一般にとらえられている⁽³⁾。しかし、これは當該資料の△聲點の全例の検討を経ていわれているものではない。また、△聲點に特に注目して説いたものも少ない。さらに、△聲點の用いられ方は資料によって異なるようであり、△聲點の機能については、それぞれの資料について検討を加えなければならない。

三、『辨正論』保安四年點の△聲點

右のような理由から、筆者がこれまで原本を調査できた資料の中で、△聲點の加點例がもっとも多い『辨正論』保安四年點をとりあげ、その使用の實態をみてみたい。

1 『辨正論』保安四年點について

『辨正論』全八卷は、唐の法琳（五七二—六四〇）の撰である。わが國に現存する『辨正論』の古寫本は、全卷完備したものとしては、石山寺一切經藏に嘉應二年（一一七〇）の寫本があるのみである。

このたび取りあげる『辨正論』保安四年點は、保安四年（一一二三）に法隆寺一切經の内の一卷として書寫・加點されたものである。この保安寫本は、現在、法隆寺に卷第一・第四が存し、卷第二は大東急記念文庫藏、卷第三は築島裕藏となっている。この寫本の第五・六・七・八卷は、所在不明である⁽⁴⁾。

次に現存する卷第一から第四の奥書を示す⁽⁵⁾。

〈卷第一〉

以同四月十六日移點比較已了爲自他開惠眼也（朱）

保安四年癸卯四月七日法隆寺一切經内五師靜因書寫畢(墨)

〈卷第二〉

同月僧靜因移點比校了(朱)

保安四年癸卯四月中法隆寺一切經内暹尊大法師筆作也(墨)

〈卷第三〉

同年六月四日當寺僧一校移點已了西門南邊任法師覺印／興福寺善法房之本以三本校正高名本也(朱)

保安四年四月六日奉書寫了依法隆寺住僧法靜房勸進／一切經之内辯正論三五兩卷書之以此功德力爲奉令／過去二

親并三人尊靈往生極樂致誠僧覺嚴敬白(墨)

〈卷第四〉

保安四年癸卯六月十六日書寫了／勸進沙門法隆寺五師琳幸結緣書寫寺僧靜尋／廻向无上大菩提(墨)

卷第一・第二・第三には喜多院點の訓點が加點されている。卷第四には訓點がないらしい。訓點は、移點によるものであることが奥書から知られるが、その祖點については未詳である。⁽⁶⁾

卷第一の法隆寺藏本は、筆者未見であるため、本稿の對象は、卷第二・第三の訓點とする(以下、これを本資料ともいう)。

卷第一の本文を書寫し、卷第二に加點している靜因は、法隆寺の五師の一人であり、天治元年(一一二四)には『新撰字鏡』卷第一を書寫し、大治元年(一一二六)には『大唐西域記』(法隆寺・神田本)を書寫加點している。ヲコト點は、喜多院點(法相宗所用)である。本資料書寫加點の保安四年は、『新撰字鏡』卷第一書寫の前年にあたる。卷第三の加點者覺印も、法隆寺の五師の一人であり、法隆寺一切經の勸進に大きく寄與した僧である。⁽⁷⁾

卷第二・三のヲト點は、左のような加點で、全卷（卷第二全四一一行・卷第三全六二六行）に互っている（卷第二によって示す。ただし、卷第三の方が全體的に加點が詳しい。）

1行目 『公子問て曰（ク）・竊に道門の齊法を（反）覽め（ル）に、略して二等（反）有り。

320行目 「於」自然高（平輕）一名（平）は「於」『上（去）京（平）に（反）發（入輕）し、雅（上△）一調（平）は「於」下（去）一國（入輕）に流る。

2 本資料の字音の系統

まず、本資料の漢字音は、假名書き音形から、いわゆる漢音の系統であることが知られる。

卷第二へ（ ）内は、所在行數。以下、同じ。

晁（ヘン）（60） 維（キ）（173） 鈎（コウ）（229） 禮（レイ）（237） 兮（ケイ）（251） など。

卷第三

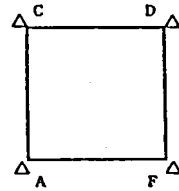
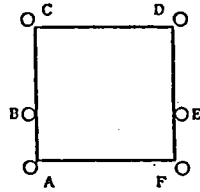
納（タフ）（182） 欣（キ）（245） 卿（ケイ）（246・385） 響（ケイ）（606） 夏（カ）（525） など。

假名書き音形からあきらかに吳音と判斷される例は、無い。

3 本資料の聲點の形式・形態

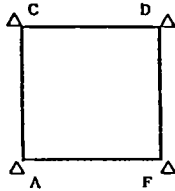
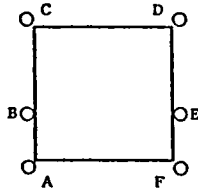
聲點の形式・形態は、つぎのとおりである。

卷第二

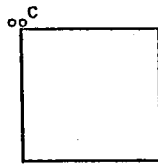


○—九八四例 △—八〇例

卷第三



○—二四八〇例 △—二四例 ∞—三例 (荷32・偉9・66)



△聲点には、○聲点のB・Eにあたる位置への加點例が皆無である。また、∞點は、卷三にのみ見られ、しかも三例しかない。

なお、右のように、卷第二と卷第三とでは、○聲点・△聲点の割合も異なる。よって、以下の考察では、卷第二と卷第三とを分けて進めることとする。また、卷三は、聲点加點例が多いが、△聲点は卷二の四分の一程度である。し

たがって、卷二を主とし、卷三を従として検討することにする。⁽⁸⁾

4 本資料の聲調體系

△聲點が、どのような聲調體系の中で加點されたものであるのかを知るために、以下の検討をおこなう。

a 『廣韻』聲調・聲母の清濁との對應關係

右の、AからFの聲點を、聲調體系を整理する常套手段として、廣韻の體系と對比すると、表1(卷第二)・表2(卷第三)のようになる。

表1(卷第二)から以下の點が知られる。

A點は、『廣韻』の平聲濁・次濁字に多く加點され、平聲清音字にも比較的多くの加點例が見られる。

B點は、『廣韻』の平聲清・次清字に多く加點されている。

C點は、『廣韻』の上聲清・次濁字に多く加點され、上聲次清字にも所屬字數から見て比較的多くの加點例が見られる。

D點は、『廣韻』の上聲濁字と去聲字に多く加點されている。

E點は、『廣韻』の入聲字に多く加點されている。中でも清・次濁音字に比較的加點例が多い。

F點は、『廣韻』の入聲字に多く加點されている。中でも濁音字に比較的加點例が多い。

表2(卷第三)も同様である。ただし、E點・F點の差が小さくなっている。

b 調類

本資料の聲點A～Fは、卷第二・第三とも、『廣韻』の聲調・聲母とそれぞれ獨自に對應している。よって、A～F點は、それぞれ別の調類であると考えられる。すなわち、六聲體系である。これは、日本漢音の中心的な聲調體系

である平聲（A點）・平聲輕（B點）・上聲（C點）・去聲（D點）・入聲輕（E點）・入聲（F點）の六聲體系と一致するものである。

c △聲點の聲調體系

本資料の△聲點だけを取り出し、右と同様な整理をすると、表1（卷第二）・表2（卷第三）のようになる。この二表と全體の表（表1・表2）との相違點として、次の點を指摘できる。

① 輕聲が見られない。

② 次濁音字に集中している。

△聲點は、平聲・上聲・去聲・入聲の四聲體系である。⁽⁹⁾ 次濁音字に集中している點は、次節で検討する。

右の相違點を除けば、『廣韻』の聲調・聲母の清濁との對應關係は○聲點と大きく異ならない。

5 本資料の△聲點の機能

a △聲點の加點例

はじめに、△聲點が加點された漢字のすべてを聲母別に掲げる。

卷第二（五四字八〇例）

次濁聲母字（三六字五九例）（各聲母の下の（ ）内の↓の上は中古音の推定音、下は漢音の母胎音の推定音。⁽¹⁰⁾ 一つ

だけ記入しているのは音の變化が無かったことを示す。以下同じ。）

疑母（り↓ng）（漢字の下の（ ）内は、所在行數・假名音注へ存する場合）である。以下同じ。）

雅（320）外（217）顔（367・372）僞（239）儀（215・221）義（399）仰（311）元（38・131）言（297・319・333・343・347・

347・396）五（318）藝（407）訛（136）魏（282）

日母 (n ↓ ŋ)

弱 (344) 擾 (308・セウ) 人 (231) 然 (299・340) 二 (310) 稔 (305・シム)

泥母 (n ↓ ŋʒ)

内 (217) 狻 (300・タウ)

娘母 (ŋ ↓ ŋʒ)

濃 (404・チヨウ)

明母 (m ↓ mb)

墓 (222) 母 (376) 民 (30) 名 (373) 綿 (269)

微母 (m ↓ mb)

烝 (19・ホ) 微 (227・227・227・228・348) 武 (32・311) 文 (311・407) 亡 (49) 無 (97・175・182・324・354) 冕 (60・ヘン)

无 (373・373・374) 萬 (321・332)

次清聲母字 (一字二例)

滂母 (pʰ)

朴 (324・342・ホク)

全濁聲母字 (八字九例)

奉母 (v ↓ f)

父 (234)

群母 (g ↓ k)

群 (303) 桀 (298・ケツ)

神母 (d₃ ↓ tj)

神 (235・367)

禪母 (3 ↓ j)

屬 (46) 辭 (369)

匣母 (ɣ ↓ z)

骸 (365) 玄 (178)

全清聲母字 (九字一〇例)

端母 (t)

藝 (30・テム) 典 (281)

見母 (k)

嘉 (321) 監 (48) 詭 (272・295・クキ)

精母 (ts)

濟 (18)

山母 (s)

朔 (274)

心母 (s)

索 (327)

幫母 (p)

狼 (32・ハイ)

右のとおり次濁聲母字に加點された例が多い(全八〇例のうち五九例)。卷第三においても同様である。

卷第三(一八字二四例)

次濁聲母字(一二字一八例)

疑母

儀 (348) 義 (159・164・164・164・178) 元 (391) 御 (422) 魏 (391・459)

日母

讓 (536)

泥母

内 (155・155)

明母

明 (96) 美 (97)

微母

萬 (421)

來母

離 (547) 連 (547)

次清聲母字(一字一例)

透母

梯 (599)

全濁聲母字 (二字二例)

匣母

形 (551)

定母

諫 (172・テフ)

全清聲母字 (三字三例)

見母

高 (552)

曉母

赫 (91)

照母

酌 (423・シヤク)

廣く知られているとおり、全濁聲母字には、日本漢音において頭音がいわゆる濁音 (ガ・ザ・ダ・バ行音) となるものがある。それは、疑母・日母・泥母・娘母・明母・微母の漢字である (ただし、泥母・娘母・明母・微母の撥音尾字はナ・マ行音となるものがある)。

この疑母・日母・泥母・娘母・明母・微母の漢字は、○も含めた聲點加點例全體の中では約一〇%にすぎない。と

ころが、△聲點に限ると、右のように七〇%を越えるのである。

よって、本資料の△聲點のうち次濁字に加點されたものは、従來の認識のとおりいわゆる濁音を示すと言えるであろう。問題は、少數ながら次清・全濁・全清音聲母字に加點された△聲點が存することである。

巻第二から検討する。

次清聲母字の「朴」は、「ボク」の音が他の漢音資料にも見られる。いわゆる慣用音である。

濁聲母字はすべて、吳音形との相違が頭音の清濁のみの漢字であり、吳音の濁音形の混入の可能性がある⁽¹¹⁾。

清聲母字のうち狼は、「バイ」の音が他の漢音資料にも見られる。また、残りの例のうち「藝・典・嘉・監・朔」は、それぞれ「昏藝」「王莽典樂」「返播嘉聲」「天監」「東方朔」と撥音尾字の次に位置しており、連濁の可能性が考えられる。

索・詭・濟は、漢音資料に濁聲點加點例を未だ見いだせないが、索は吳音ジャクの混入か。詭・濟は、あるいは連濁例の音が固定したものであろうか。

卷第三の定母の「謀」は、吳音形「デフ」の混入の可能性がある。照母の「酌」は、「斟酌」の用例であり、連濁の可能性が考えられる。しかし、その他の例(四字四例)については、吳音形の混入・連濁という理由では説明できない。また、次濁字の來母の字に加點例がみられる(離・連)⁽¹²⁾のも、現在の「濁音」とは異なる。

右のように、卷三に疑問例が比較的多いが、本資料の△聲點は、いわゆる濁音を示す濁聲點であるといえる。

b △聲點が加點された漢字への聲點加點

△聲點が加點された漢字は、常に△聲點ばかりが加點されているわけではない。次節においてその實態を見るが、ここでは、同一の語であっても異なる聲點が加點された例を掲げておく。

藝文(卷二151) 藝文(卷二407)

萬機(卷三123) 萬機(卷三421)

。 次濁字に對して加點された聲點

△聲點は、その大部分が次濁字に加點されていた。そこで、次濁字に對する聲點加點例の全例を見てみる。

次濁聲母字のうち、來(1)・于(φ)・喻(j)母の聲點加點例には△聲點は加點されず、すべて○聲點である(ただし、卷第三に二例ではあるが來母の字に加點された例がある)。

また、日本漢音の頭音がいわゆる濁音となることが原則の疑母・日母・泥母・娘母・明母・微母の漢字(ただし、泥母・娘母・明母・微母の撥音尾字を除く)への聲點は、以下のとおりである(卷第二の例へ一五六例)を示す。

疑母(○△の下の數字は複數の場合の例數である。以下、同様)。
雅△ 外△ 顏△2 僞△○2 儀△2 義△ 魚○ 仰△ 玉○3 偶○ 驗○ 元△ 源○ 言△7○ 五△
○2 彥○ 訛△ 魏△○2 藝△○

日母

弱△ 柔○ 擾△ 人△○3 然△2○2 溺○ 二△○ 乳○ 入○ 稔△

泥母

孫△ 內△

明母

墓△ 母△ 牡○ 茅○ 謬○ 貌○2 蜜○ 妙○2 目○ 歿○ 謚○

微母

系△尾○ 微△5○ 武△2 無△5○ 巫○ 无△4

疑母・日母・泥母・娘母・明母・微母の漢字（泥・娘・明・微母は撥音尾字を除く）九〇の聲點加點例のうち、△聲點が四九例・○聲點が四一例であり、ほぼ同數である。日本漢音において濁音となるのが原則の漢字に對して加點されている聲點のほぼ半數は、濁音であることを示していないのである（卷第三では濁音であることを示さない比率が大幅に増える）。

いま、比較のために『蒙求』長承三年（一一三四）點の同じ聲母の漢字に對する聲點加點例を見ると、濁音を示す符號（双點）が加點された例五五例に對して、單點のみの例が一一一例である。同一字に對して双點加點例と單點加點例の兩例ある状態は本資料と同様である。たとえば、「五」は双點二例・單點四例、「馬」は双點四例・單點六例、といったようすである。しかも、全文の音讀を前提とし、その音を丹念に加點した『蒙求』ではあるが、本資料よりもはるかに濁音表示の割合は低い。

さらに、本資料の△聲點は、全巻を通じて偏りなく現れるわけではない。卷第二の初出例は、一八行目であるが、前半部分には加點例が少なく、前半・一七例、後半・六三例という偏りを見せる。○聲點も後半部分に約二倍の加點例がみられるが、△聲點の場合ほどの偏りではない。卷第三においては、前後半の偏りは特にないが、初出が九一行目であり、一七九行目から三四七行目までと、四二四行目から五三五行目までには全く例がないといった出現状況である。○聲點には、このような偏りは、一切みられない。△聲點はいわゆる濁音を示すと見ることができ、その表示の仕方は、恣意的とさえいえるものである。

d △聲點が示す音聲

以上の検討から、基本的には、△聲點は本資料においていわゆる濁音を示していると解することができる。しか

し、それにはずれる例も見られること、また、加點が恣意的であることから、當時の日本語では清濁が音韻の區別に役だつてはいなかったとする説に従うべきであろう。

その清濁は、「無聲」「有聲」の對立ではなく、「非鼻音」「鼻音」の對立であつたとみる説が有力である。⁽¹⁴⁾この説によれば、△聲點は、有聲子音の直前の鼻音を表していることになる。△聲點の△は、假名「ム」に近く書かれる。ムは、唇内撥音（鼻音）を表す假名として平安後期に定着した。そのム（△）によって鼻音を表示しようとしたものかもしれない。⁽¹⁵⁾

四、△聲點の起源と沿革

本資料の△聲點を、濁聲點として△聲點が加點された資料の流れのなかに位置づけてみる。

△聲點が加點された資料について觸れたものに以下の論考がある。

A 築島裕「濁點の起源」（東京大學教養學部「人文科學紀要」第三三輯。一九六四年四月。）

B 築島裕「△形の聲點について」（『興福寺本大慈恩寺三藏法師傳古點の國語學的研究 研究篇』。一九六七三月。二

六〇～二六二頁。）

C 井上親雄「廣島大學藏八字文殊儀軌古點」（訓點語と訓點資料」第三十九輯。一九六八年十月。）

D 崎村弘文「九州大學所藏儀軌類について」（訓點語と訓點資料」第六十二輯。一九七九年三月。）

E 沼本克明「濁點形式の統合史素描へ——高山寺所藏資料による——」（平成三年度高山寺典籍文書綜合調查團研究報告

論集」。一九九二年三月。）

F 花野憲道「隨心院藏源信撰述『普賢講作法』の訓點」（訓點語と訓點資料」第八十七輯。一九九一年九月。）

G 沼本克明「濁音字母から濁聲點へ―濁點の起源論續貂―」(「國語學」一七二輯。一九九三年三月)。
 これらの論考で觸れられた資料に若干の資料を加え、加點年代順に並べてみると、次の表のようになる。⁽¹⁶⁾

加點年代	文獻番號・文獻名	ヲコト點 (宗派)	濁音表示法		備考
			梵語音 無表示・表示	漢字音 無表示・表示	
一〇四〇	1 高野山持明院藏 『建立護摩儀軌』	西墓點 (天台宗寺門派)	?	〇〇 △	ABG
一〇四三	2 九州大學藏 『成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌』	西墓點 (天台宗寺門派)	..	〇 〇〇 △	G
一〇四五	3 石山寺藏 『金剛界儀軌』	西墓點 (天台宗寺門派)	△	△	G
一〇六〇	4 東寺藏 『大日經廣大成就儀軌』	西墓點 (天台宗寺門派)	△	〇〇 △	G
一〇八〇	5 東寺藏 『佛說毘沙門天經』	西墓點 (天台宗寺門派)	?	△	AB
一〇八七	6 龍門文庫藏 『佛說六字神呪王經』	西墓點 (天台宗寺門派)	..	〇〇 △	一〇八〇年は祖點 一〇八八年は祖點
一〇八八	7 東寺藏 『降三世儀軌』	西墓點 (天台宗寺門派)	..	〇〇 △	寫
一〇九九	8 廣島大學藏 『佛說六字神呪王經』	西墓點 (天台宗寺門派)	..	〇〇 △	寫
一〇九九	9 興福寺本 『大慈恩寺三藏法師傳』	喜多院點 (法相宗)	..	〇〇 △	B
一一〇〇	10 興福寺藏 『高僧傳卷第十三』	喜多院點 (法相宗)	..	〇〇 △	B
一一〇〇	11 高山寺藏 『不動儀軌』	西墓點 (天台宗寺門派)	..	〇〇 △	E
一一一四	12 東寺藏 『甘露軍荼利儀軌』	西墓點 (天台宗寺門派)	..	〇〇 △	G

一一一四	13 東寺藏 『焰曼德迦儀軌』	西墓點 (天台宗寺門派)	•	•	•	•	•	寫
一一一六	14 九州大學藏 『金剛頂瑜伽千手千眼菩薩修行儀軌經法』	西墓點 (天台宗寺門派)	•	•	•	•	•	
〇一一三	15 大東急記念文庫藏 『辯正論』卷第二 『三教治道篇』	喜多院點 (法相宗)	•	•	•	•	•	
〇一二三	16 築島裕藏 『辯正論』卷第三	喜多院點 (法相宗)	•	•	•	•	•	
一一二六	17 法隆寺・國會圖書館藏 『大慈恩寺三藏法師傳』	喜多院點 (法相宗)	•	•	•	•	•	A B
一一二八	18 大東急記念文庫藏 『大輪金剛修行悉地成就及供養法』	西墓點 (天台宗寺門派)	•	•	•	•	•	
院政期	19 圖書寮本 『類聚名義抄』篇目	喜多院點 (法相宗)	•	•	•	•	•	複製本
院政期	20 金剛三昧院藏 『十住心論卷第四』	喜多院點 (法相宗)	•	•	•	•	•	B
院政期	21 隨心院藏 『普賢講作法』	仁都波迦點 (天台宗寺門派)	•	•	•	•	•	F
一一三一	22 大東急記念文庫藏 『熾盛光佛頂儀軌』	西墓點 (天台宗寺門派)	•	•	•	•	•	
一一三二	23 九州大學藏 『大毘盧遮那成佛神變經』	西墓點 (天台宗寺門派)	•	•	•	•	•	
一一三四	24 九州大學藏 『金剛頂瑜伽蓮華部心念誦儀軌』	西墓點 (天台宗寺門派)	•	•	•	•	•	
一一三六	25 高野山持明院藏 『建立護摩儀軌』	西墓點 (天台宗寺門派)	•	•	•	•	•	A B
一一四八	26 大東急記念文庫藏 『俱摩羅儀軌』	西墓點 (天台宗寺門派)	•	•	•	•	•	
一一五三	27 西南院藏 『蘇悉地經』	西墓點 (天台宗寺門派)	•	•	•	•	•	B
一一五七	28 眞福寺藏 『大日經疏』	喜多院點 (法相宗)	•	•	•	•	•	

一一六一	29 廣島大學藏 『八字文殊儀軌』	西墓點 (天台宗寺門派)	○						
一一七〇	30 國立國語研究所藏 『金剛頂大教王經』	喜多院點 (法相宗)	○	△	△△	○	○		
一一七五	31 大東急記念文庫 『諸尊次第』	西墓點 (天台宗寺門派)	○	○	○	○	○		
一一八八	32 高山寺藏 『宿曜占文抄』	△假名點	○	○	○	○	○		
鎌倉中期	33 廣島大學藏 『大毘盧遮那成佛神變加持經』	西墓點 (天台宗寺門派)	○	○	○	○	○		
南北朝期	34 廣島大學藏 『蘇悉地羯羅供養法』	西墓點 (天台宗寺門派)	○	○	○	○	○		

(備考のA-Gは、右の論考に依ったことを示す。寫は、廣島大學藏の寫眞によったことを示す。無記入は佐々木の調査である。)

△聲點の起源と沿革について、E論文(沼本)は、次のように述べている。

早い時期のものは全て西墓點のものばかりである。従ってこの形式は天台宗寺門派での發想ということになる。後に山門派へ波及し、更に喜多院點の法相宗へも波及したということになるが、築島博士も注意されているように、眞言宗には、この「△」という濁點は及ばなかった様である。

① 起源

沼本の指摘のとおりであって、早い時期のものはすべて西墓點の資料ばかりである。したがって、現在のところ、天台宗寺門派で考案されたと考えておかなければならない。⁽¹⁷⁾

② 沿革

△聲點は、「後に山門派へ波及し」とされるが、天台宗山門派の加點資料は仁都波迦點の一資料(文獻番號21)

のみである。これは、一一世紀初頭以降延暦寺所用となり一二世紀以降は延暦寺内で最大の勢力を持ったヲコト點である寶幢院點に、△聲點と同形のヲコト點(ベン・マウサクなど)が存したからであろう。また、従来の指摘のとおり、眞言宗には波及していない。眞言宗に受け入れられなかったのは、これも眞言宗で用いられたヲコト點の主要なものの一つである「東大寺點(東南院點)」に、△聲點と同形のヲコト點(タマハム・トマウシキ)が存したからではないだろうか。天台宗山門派・眞言宗に廣まらなかつた點、△聲點は他の濁聲點(∞∞・∞∞・∞∞・∞∞・∞∞)と異なる。

△聲點は、その後、法相宗に傳つた。この事實は、院政期における天台宗と法相宗との交流を示すものである。當時、兩宗の學を承けた僧がいたこと、天台・法相・眞言の諸宗間の學問上の交流があつたことは、指摘される⁽¹⁸⁾ろである。

その他、右の表から次のような事柄に氣づかれる。

第一に、△聲點は、漢字音の濁音表示に主として用いられていることである。陀羅尼・梵語音の濁音表示に用いられる場合は、他の符號を補助する形で使用される。梵語音の清濁を○と△のみで區別する資料は見出されていない。これは、梵語音の清濁が「無聲」「有聲」の對立であつたのに對し、日本漢字音の清濁が「非鼻音」「鼻音」の對立であり、△聲點は、有聲子音の直前の鼻音を表示するための聲點であつたからではないだろうか。

第二に、漢字音の濁音表示に△聲點を用いている資料は、その聲點の用い方によって、次のように分けられることである(實態が不明の資料は除外)。

a 濁音表示に聲點だけを用いる資料。

資料番號——3・5・14・18・22・23・26(以上、西墓點)・10・15(以上、喜多院點)・21(仁都波迦點)

b 濁音表示に△聲點がおもに用いられ、他の符號が例外的に用いられている資料。

資料番號——16・17（以上、喜多院點）

c 濁音表示に△聲點の双點を用いる資料。

資料番號——19・28・30（以上、喜多院點）

d 濁音表示は他の符號がおもに擔い、△聲點が補助的に用いられている資料。

資料番號——1・2・4・6・7・8・11・12・24・29・31・33・34（以上、西墓點）・9（喜多院點）・32

（假名點）

漢字音について○・△だけで清濁を示す方法も天台宗寺門派でまず始められたらしい。しかし、西墓點加點資料では、梵語音には・を主に使用しており、その後、△聲點を補助的にしか用いないものが増えていく。一方、喜多院點加點資料は、全體數は少ないが、資料9を除き、△聲點を主に用いるa・bおよびcに分類されている。

この事實は、次のように解釋できる。すなわち、天台宗では、梵語音の清濁表示のために・の聲點が使用され、後に漢字音の鼻音表示のために△聲點も考案された。さらに、梵語音と漢字音とがともに日本語音化した段階で、古くから使用されていた・が漢字音の清濁表示にも用いられた。しかし、法相宗の喜多院點資料では、梵語への加點が一般的でなかったため、△聲點¹⁹を使用した資料では、・は使用されることが少なかった。

よって、△聲點が漢字音中心に使用されたことと法相宗でよく用いられたこととは、無關係でないことになる。

五、むすび

以上、濁聲點の一つといわれる聲點「△」の機能を、一資料について検討し、最後に聲點「△」の歴史の中に位置

づけてみたところ、次の點が判明した。

- 1 『辨正論』保安點の聲點「△」は、いわゆる濁音を表示しているものと判断される。
- 2 『辨正論』保安點の聲點「△」の聲調は、廣韻の聲調・聲母との對應關係という觀點から、聲點「○」の聲調と基本的には一致する。ただし、輕聲は見られない。
- 3 濁點は、梵語音の濁音を示す必要から發生したことが明らかになっているが、聲點「△」は、漢字音の鼻音表示符號として考案されたものらしい。
- 4 いわゆる濁聲點としての聲點「△」は、天台宗寺門派で使われ出したが、その後は法相宗で比較的よく用いられた。

また、最後の表を見ると、濁聲點をいくつか併用している資料では、それらの濁聲點に使い分けの規準があつたのかどうかという疑問點が出てくる。今後の課題としたい。

平安後期に複数の濁聲點が考え出され、やがて一つに統合されたのであるが、複数の濁聲點が同時に存在し、同一資料中に使用されたのにはそれなりの理由があつたのではないかと考えるのである。

注

(1) 吉澤義則「本邦音符考」(『國語國文の研究』所收)。同「濁點源流考」(『國語說鈴』所收)。春日政治「高野山にて觀たる古點本一二」(『古訓點の研究』所收)。同「假名の沿革」(『國語文化講座 二』所收)。築島裕「濁點の起源」(『東京大學教養學部 人文科學紀要』第三三輯)。同「古點本の片假名の濁音表記について」(『國語研究』第三三號)。同「大東急記念文庫藏金剛界儀軌の古點について」(『かがみ』第拾壹號)。沼本克明「濁音字母から濁聲點へ—濁點の起源論續紹—」(『國語學』第一七三

集。一九九三年三月。など。

(2) 沼本克明「濁點形式の統合史素描―高山寺所藏資料による―」(平成三年度高山寺典籍文書綜合調査團研究報告論集)、一九九二年三月。同「濁聲點から濁點への一齣」(平成五年年度鎌倉時代語研究會)口頭發表。一九九三年八月二日。

(3) 注(1)(2)の諸論考のなかで、濁聲點の一つとして觸れられている。

(4) 川瀬一馬『大東急記念文庫貴重書解題 佛書の部』(一九五六年)、築島裕「大東急記念文庫藏三教治道篇保安點」(「かみ」第八號。一九六三年)、同「法隆寺本辨正論保安點」(「春日和男教授退官記念語文論叢」(櫻楓社)所收。一九七八年)、同「架藏辨正論卷第三保安點」(「古典研究會創立二十五周年記念國書漢籍論集」(汲古書院)所收。一九九一年)、参照。

(5) 卷第一・第四の奥書は、築島裕「架藏辨正論卷第三保安點」に依る。

(6) 築島裕「法隆寺本辨正論保安點」は、本資料の祖點が、各卷共通のものであり、その祖點は、院政初頭をあまり遡ることのない時期の加點であったことを推測している。

(7) 詳しくは、築島裕「自證房覺印の訓點について」(和漢比較文學叢書2『上代文學と漢文學』所收。一九八六年九月)参照。

(8) 卷によるこの相違は、訓點加點者(卷第二は靜因、卷第三は覺印)が異なることによるのであろう。築島裕は、「法隆寺本辨正論保安點」の中で、卷二と卷三の字音を表わす「音」の略字としての「六」が、祖點から引き繼がれたものであることを指摘するとともに、その「六」を記した例が卷三に少ないことを述べ、假名字體の事例も併せて、卷三の加點者覺印が、卷二の加點者靜因に比べて、祖點に忠實でなかったと推測している。また、聲點△については、卷三には○とも△とも區別のつかない曖昧なものが含まれていることを指摘している。卷二靜因の方が祖點に忠實であることを前提条件とすると、聲點の加點狀況から、卷三の覺印は、加點の時に自分の判断で○聲點を新たに増補し、また、△聲點を○聲點に変えてしまったものもあつたと考えられる。○の双點も祖點には無かつたものであろう。

(9) 輕聲がみられないのは、△聲點に限らず濁聲點の特徴として挙げられるのではないかという印象をもっている。他の資料の濁聲點にも輕聲はきわめて少ないのではないだろうか。その原因として、輕聲は吳音には原則として出現せず、また、漢音で濁となるのは次濁字であるので、輕聲となるのは原則として、入聲輕のみであるということが底邊にあろう。そのうえに、濁音のような有聲子音で始まる音節は始まりが低く發音されるといふ音聲的な理由もあるのではないかと考えている(輕聲は、高く始まる聲調である)。また、連濁したときに、もと平聲輕・入聲輕であつたものが平聲・入聲に変化することも多いようである。この問題については稿をあらためて考えたい。

- (10) 推定音は、沼本克明『日本漢字音の歴史』(東京堂出版。一九八六年六月)に依る。
- (11) 佐々木勇「日本漢音資料に見られる全濁聲母字の濁音形」(『小林芳規博士退官記念 國語學論集』(汲古書院。一九九二年)所收) 参照。
- (12) 注(8) 参照。
- (13) また、管見の範囲の『蒙求』古點本のなかで、すべての漢字に聲點が施されており、しかも、もともと多くの濁聲點が加點されている天理圖書館藏康永四年(一三四五)書寫移點本で同様の調査をおこなっても、やはり五例(日本漢音で清音であったと思われる二例を除く)の濁聲點が加點されない例が残る。この資料は、反切の書き込みがあり、特に音に注意を払ったことが知られるものなのである。
- (14) 濱田敦「撥音と濁音との相關性の問題—古代語における濁子音の音價—」(『國語國文』一九五二年三月)、早田輝洋「生成アクセント論」(『岩波講座日本語5 音韻』所收。一九七七年八月)、など。
- (15) 東京大學藏『胎藏略次第』天永二年(一一一一)點・同『胎藏略次第』大治四年(一一二九)點には、ムが唇内撥音韻尾を有する漢字の聲點として使用されたことが指摘されている(月本雅幸『東京大學國語研究室資料叢書16』解題。ともにヲコト點は、中院僧正點。鼻音を聲調とともに聲點で表示しようとした點、同一の發想であると考えられる。
- (16) 表中、「濁音表示」とした△であるが、嚴密には本稿での検討と同様な作業をすべての資料についておこなわなければならぬ。いまは、先行論文に従って表を作製した。また、A論文によると、東寺藏『無量壽儀軌』天治二年(一一二五)點(寶幢院點(天台宗山門派))にも△聲點が見られるということであるが、沼本克明先生からお借りした寫眞では確認できなかったために、この表からは除外している。
- (17) 山口市龍藏寺藏『蘇悉地羯羅供養法』九〇〇年頃點(乙點圖(慈覺大師點))に△の聲點が見られる。ただし、これは、いわゆる濁音を示すものではないらしい。△の聲點自體は、天台宗山門派で使われたのかもしれない。九〇〇年から一〇四〇年までの資料の調査が進むことによって、△聲點の起源を見直す必要が生じる可能性はある。
- (18) 築島裕「喜多院點の展開」(『萬葉集研究』第十四集所收。一九八六年八月)、同「古訓點資料に現れた十一・十二世紀の佛教諸宗教學の交流—園城寺を中心として—」(『後期攝關時代史の研究』(吉川弘文館)所收。一九九〇年三月)、参照。本資料卷第三の加點者「覺印」も、法相・天台・眞言教學を兼學している。
- (19) 注(10) 文獻、一五五頁参照。

表1 大東急記念文庫蔵『辨正論』巻第二保安点の声点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	
A 点	59 (82)	16 (18)	71 (114)	58 (113)	7 (9)	4 (4)	4 (5)	3 (6)	9 (10)	4 (4)	4 (5)	9 (11)	1 (1)				250 (383)
B 点	58 (109)	13 (30)	8 (8)	2 (2)	2 (2)	1 (1)			2 (2)		1 (1)						87 (155)
C 点	15 (15)	1 (1)	3 (3)	4 (4)	30 (52)	6 (9)	4 (5)	18 (31)	2 (2)		1 (1)	2 (2)	1 (1)				87 (126)
D 点	8 (9)	1 (1)	9 (9)	6 (6)	15 (16)		24 (57)	3 (3)	42 (74)	6 (24)	17 (23)	24 (40)					155 (282)
E 点													26 (33)	9 (9)	19 (22)	16 (19)	70 (83)
F 点													15 (16)	4 (6)	16 (23)	8 (10)	43 (55)
計	140 (215)	31 (50)	91 (134)	70 (125)	54 (79)	11 (14)	32 (67)	24 (40)	55 (88)	10 (28)	23 (30)	35 (53)	43 (51)	13 (15)	35 (45)	25 (30)	692 (1064)

注) ①上段の数字は異なり字数、下段の()内の数字は例数を示す。 ②空欄は、用例が無いことを示す。
 ③同一漢字に複数の声点が付加されている場合は、それぞれの点の欄に加算している。 ④以下の表も同様。

表2 築島裕蔵『辨正論』巻第三保安点の声点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	
A 点	90 (124)	21 (24)	98 (199)	100 (290)	17 (21)	8 (9)	5 (5)	10 (12)	16 (20)	3 (3)	8 (9)	18 (18)			2 (2)		396 (736)
B 点	129 (307)	30 (67)	39 (58)	20 (27)	9 (10)	1 (1)	6 (6)	1 (1)	11 (13)	2 (2)	1 (1)	4 (5)	1 (1)				254 (499)
C 点	16 (23)	2 (2)	7 (9)	8 (9)	68 (145)	16 (26)	8 (14)	41 (95)	10 (16)	5 (7)	7 (8)	7 (13)					195 (372)
D 点	20 (30)	8 (8)	13 (16)	9 (11)	16 (20)	4 (4)	36 (87)	7 (7)	96 (213)	20 (50)	38 (75)	40 (97)				1 (1)	308 (619)
E 点													42 (55)	14 (23)	22 (26)	31 (51)	109 (155)
F 点													27 (51)	14 (22)	23 (32)	15 (21)	79 (126)
計	255 (489)	61 (101)	157 (232)	137 (337)	110 (196)	29 (40)	55 (112)	59 (115)	133 (262)	30 (62)	54 (93)	69 (133)	70 (107)	28 (45)	47 (60)	47 (73)	1341 (2507)

表1' 大東急記念文庫蔵『辨正論』卷第二保安点の△声点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	
平	2 (2)		5 (5)	16 (36)	2 (3)				1 (1)			1 (1)					27 (48)
平輕																	0
上				1 (1)	1 (1)		1 (1)	7 (8)				1 (1)					11 (12)
去			1 (1)	2 (2)				1 (1)	1 (1)			7 (8)					12 (13)
入輕																	0
入													2 (2)	1 (2)	2 (2)	1 (1)	6 (7)
計	2 (2)	0	6 (6)	19 (39)	3 (4)	0	1 (1)	8 (9)	2 (2)	0	0	9 (10)	2 (2)	1 (2)	2 (2)	1 (1)	58 (80)

表2' 築島裕蔵『辨正論』卷第三保安点の△声点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	
平	1 (1)	1 (1)	1 (1)	4 (4)													7 (7)
平輕																	0
上							1 (1)					2 (2)					3 (3)
去				1 (1)								5 (10)					6 (11)
入輕																	0
入													2 (2)		1 (1)		3 (3)
計	1 (1)	1 (1)	1 (1)	5 (5)	0	0	0	1 (1)	0	0	0	7 (12)	2 (2)	0	1 (1)	0	19 (24)